

(論説)

Sei-Tanのカレッジライフをどう送るか

—新入生への応援メッセージ—

学長 大久保 英 哲

本稿は、Sei-Tan一年次「クラスコミュニティ」の授業の一環として行われた「学長講話」を加筆・修正したものです（注1）。

はじめに

皆さん。こんにちは。学長の大久保です。入学式からひと月。新型コロナウイルス感染拡大に伴って、大学の授業も対面と遠隔のハイブリッド方式を状況に応じて活用しながら進めています。

皆さん学校は楽しいですか。友達はできましたか。困っていることはありませんか。

「わたし」は今どこに在るの」と踏みしめた足跡を 何度も見つめ返す

枯葉を抱き 秋めく窓辺に かじかんだ指先で 夢を描いた

翼はあるのに 飛べずにいるんだ ひとりになるのが 恐くて つらくて

優しいひだまりに 肩寄せる日々を 越えて 僕ら 孤独な夢へと 歩く

サヨナラは悲しい言葉じゃない それぞれの夢へと 僕らを繋ぐ YELL

ともに過ごした 日々を 胸に抱いて 飛び立つよ 独りで 未来の 空へ

ご存じ、いきものがかり「エール」の歌詞の一節です。私はこのメロディー、歌詞が大好きです。2009年NHK合唱コンクール中学校の部・課題曲となったこの合唱曲も大好きで、聞くたびに、サヨナラを繰り返しながら、次の人生を生きていかざるを得ない人間という存在の、胸が締め付けられるような切なさといとおしさで胸がいっぱいになります。思わずエールを送りたくなります。

皆さんも一人ひとりが高校を飛び立って、大空に舞い上がり、縁あって着地したのは、ここ Sei-Tan。さあここが皆さんの着地点。ここで皆さんの花を咲かせてごらん下さい。やがて2年後、また新たな翼を得て、また一人で未来の空へ飛び立たねばならないのです。Sei-Tanの2年間は短いのです。まさに一期一会。

そこで、今日は皆さんに、Sei-Tanの2年間をこんなふうに送って欲しいという、私なりの思いを語ってみたいと思います。

1 学べる喜びを大切に

私は2022年の年男で、72歳を迎える老人です。生まれは青森県、決して裕福ではない家庭で育ちました。4人兄弟妹の兄と妹は高校を終えて就職、私と弟は大学に行きましたが、二人ともアルバイトで生活費を稼ぎ、ようやく卒業。その後も私は学費を稼ぎながら、大学院に通いました。なけなしのお金は、学費と本代と酒代に消え、30歳で結婚した時には、ほとんど無一文。結婚式は友人のお世話で会費制でした。そのことからもお分りのように、私はお金には本当に縁がありませんでした。それだけにお金のありがたさも分かります。親の苦労も分かります。そもそも、高校を終え、さらに短大や大学に進学しようという時に一番必要なのはお金です。経済的なゆとりです。

2019年の世界の平均大学進学率は平均38%程度。日本の大学進学率は51%で、この世界平均よりは高いのですが、OECD諸国平均は61%ですから、日本の大学進学率は決して高いとは言えません。また先進諸国が大学進学率を上昇させている中で、日本の伸びは低位なのです（注2）。高校を終えて、大学で勉強をしてみたいと希望する日本の若者たちをもっと支援する教育政策が必要だと思いますが、若者や教育は政治の面では後回しにされているのが現状ですね。学びたいけれどもその思いがかなわない人たちもたくさんいるのです。

皆さんの中にも、経済的には厳しいけれど、「二年間だったらなんとか頑張れるから」と、親も言って下さり、自分でも「できるだけアルバイトをして、家計に負担をかけないようにする」からと決心して、本学に入学された方もいると思います。学業とアルバイトを両立させるのはたいへんです。どうか2年間、体を壊さないで頑張ってください。Sei-Tanは総力を挙げて皆さんを支えたいと思います。この二年間が貴重な学びの機会であることを自覚し、学べる喜びを大切にさせていただきたいと思います。

2 Sei-Tanはどんな大学か

(1) その目的とかたち

世の中のモノにはすべてかたちがあります。例えば茶碗一つとっても、ごはん茶碗、抹茶用など様々です。つまり、何に使うのかという目的が先にあって、それによってかたちが決まるのです。自動車もそうですね。目的（用途）によって、バスやトラック、クレーン車からスポーツカー、乗用車まで様々なかたち（姿）になります。大きな車もありますが、生活に便利で使いやすい軽自動車もあります。軽自動車というのは少し小さ目ですが、日本では特に働く人々、女性、個性を求める人たちから圧倒的な支持があり、独自の発達を遂げています。

実は大学もそうなのです。ノーベル賞をもらえるような研究者を育てる大学もあれば、地道にまじめに働いて社会に役立つ人間を育てることを目指す大学もあります。

Sei-Tanは、「誠実にして社会に役立つ人間」というスローガンを掲げ40年。地域で地道に働き、社会に貢献する女性たる人材育成を目指します。「経営実務科」というのは、この地域のビジネス界や企業で働く女性を育てます。今の時代、コンピュータ、簿記会計、税務事務、英会話は常識。受付や窓口に立つ人ならば、笑顔や言葉遣い、女性の品格あるマナーやら振る舞いも大事です。自営業や新たに起業する場合はなおさらですね。

例えてみるならば、標準装備の大きな車というよりは、小回りが利いてきびきびと動く、フル装備のおしゃれな軽自動車のイメージですね。「二年で四年を超える」というSei-Tanの標語はこうした意味で考えるとわかりやすいかもしれません。Sei-Tanのカレッジライフはすこしばかり忙しいかもしれませんが、その代わり充実した二年間になります。大きな車より軽自動車のほうが良いという選択があるように、このほうが自分には合っていると、最初からSei-Tanを選んでくださる学生も多いのです。実務家としての能力や資質・資格とともに、人としてどう生きるかの知性や感性といった人間力を兼ね備えた「誠実にして社会に役立つ」本学の卒業生たちは、おかげさまで、社会や企業の方々から確かな信頼と支持をいただき、高い就職率を誇ります。

もちろん大学や大学院と同じキャンパスにありますから、もっと勉強したいと考える方は、経済、人間科学、人文などの授業を受けることもできますし、進学も可能です。部活動やサークルなども共有できます。そこにはいろいろな出会いもあることでしょう。それもSei-Tanの魅力です。

さて、モノにはすべてかたちがあって、それには目的が先行するのだと申し上げました。実は一つだけ例外があります。それは人間です。どんな夢に向かって生きようとするのか、どんな生き方をするのか、それを決めるのはあなたなのです。

(2) 女子大ということ

またSei-Tanは女子大という点に特色があります。私たちは、皆さんに人間としてどう生きるかを語りますが、型にはまった女性の生き方を教えるわけではありません。女性としてどう生きるかは、皆さんのお母さんやおばあさん、先生方など大人の女性をよく見て、最終的に皆さん自身が決めることなのです。

日本の社会では、男女平等とはいいいながら、往々にしてリーダーシップは男性に任せてしまいがちです。しかし、Sei-Tanでは女子大ゆえに皆さん自身がとることになります。それによって得られるリーダーシップの経験や自信、またフォロアーシップも着実に身につけることができます。さらに、例えばブライダルについて学ぶ授業やヘアメイクを実践的に学ぶ講座などでは、その道のプロを招いて、女性の特性や品格ある振る舞いを徹底して磨き上げます。男女共同参画社会の実現には、このような輝く女性の果たす役割がいつも重要になります。

いっぽう、皆さんの中には、男女共学に親しんできて、女子だけの環境に慣れることができるか不安とを感じる人がいるかもしれません。しかし全然心配要りません。同じキャン

ンパスには千人を超える男子がおりますので、決して寂しいことはないでしょう。昨年2020年度天皇杯全国大会に出場した金沢星稜大学サッカー部のマネージャーはSei-Tanの女子学生でした。大勢の男子部員たちを見事に取り仕切って活躍しておりました。今は大手の建築設計会社でやはりたくさんの男性社員たちを取り仕切って頑張ってくれています。

(3) 二年で四年を超える

Sei-Tanでは、学生目線のスローガンとして、「夢を力に、二年で四年を超える！明日輝く女性になる！」を掲げています。この「二年で四年を超える」というのは、二年間で経営実務の知識や技能をしっかりと学んで、四大卒と肩を並べてやっていける力をつけましょうというものです。高卒、短大卒、大学卒で、給与水準が異なることは皆さんご存じでしょうか。国家公務員の初任給は、おおざっぱに高卒15万円、短大卒18万円、大卒21万円です（注3）。企業の人事担当者にお聞きすると、短大卒は魅力的なのだそうです。大卒と同等の仕事ができるのであれば、大卒よりも少なくとも二年間長く働いてベテランになってもらえる可能性がありますし、給与も少し抑えられる。仮に同一労働、同一賃金に移行したとしても短大のメリットは大きいのだそうです。優秀な短大卒女子。企業からのSei-Tanへの期待は極めて大きいのです。

「二年で四年を超える」というのは、ですから「二倍勉強しましょう」ということでもあるのです。そのため、やや忙しい二年間になりますが、その分、充実度も二倍です。中には「のんびりした四年より、充実した二年のほうが良い」と、Sei-Tanを選んでくださる方もいます。短大二年を終えて、有利な就職を選ぶもよし、さらにプラス二年間という意識で大学に進むというのも新しい学び方、賢い選択ではないかと思います。

(4) 金沢星稜大学と同一キャンパスにあるという強み

Sei-Tanが金沢星稜大学や大学院と同じキャンパスにあるという強みもぜひ生かしてください。図書館や情報関連センター、進路支援サポート、スポーツ施設、講義室、クラブ・サークル活動、大学行事なども共有することができます。先生方も学生も、経済、人間、人文といった様々な専門分野を持ち、さらに、留学生、そして皆さん、とバラエティーに富んでいます。若い時に多様な考え方や人間に触れることは一生の宝物になります。

3 誠実にして社会に役立つ人間の育成

(1) 「誠実」ということ

Sei-Tan「経営実務科」教育における最大の特徴は、「実務家」に徹するところにあります。実務家というのは、大きな視野から物事を考えることはもちろん必要ですが、何より

も日々、目の前の事柄を一つひとつきちんと手を抜かずにこなし続ける力を持った粘り強い人のことを言います。少数意見であることを恐れずに語れる知性と、自分を主張できる勇氣はそうした中で鍛えられるものです。

もちろん、一つひとつのことをやり続けるとことは言うは易く、行うのは実は大変なことです。「三日坊主」という言葉があり、日記など三日間書き続けるのも大変だと言われますが、これはまあ何とかできるでしょう。若い頃に「あなたは暗い性格だ」と言われ、「ならば明るく振る舞ってみよう」と意識して取り組んだという老俳優さんがいます。三日位では周りから「無理している」、三か月経つと、「あれ、この頃明るいね。何か良いことでもあったのかしら」。三年経つと「あの人は変わったね。明るくなった」と言われ、30年経つと「あの人は明るさそのものだ」と言われたそうです。続けるということのすごさですね。

「非凡というのは平凡な努力を重ね続けられる人」という言葉もあります。そこには実務家としての勉強を積み重ねるという行為の中で、人としてどう生きるかの知性や感性もまた磨かれるのだという日本の伝統的な修行観、人間観があります。

私が尊敬する実務家の代表は、江戸時代後半期の伊能忠敬（いのうただたか、1745-1818）です。もともとは下総（しもふさ）（千葉県）の農民で、酒造などの経営者でもあった伊能は、50歳になってから17年かけて、日本中を実測して歩き、のちに明治になってやってきたヨーロッパ人をも驚嘆させる日本地図を作り上げました。井上ひさし『四千万歩の男』（注4）という作品になっています。日本の歴史学者の網野善彦氏（1928-2004）は、お百姓さんという言葉は、農民を意味するだけではなく、百の姓（職業）、つまり農民だけではなく商業や手工業などの多様な生業の従事者を意味していたと述べています。だから、伊能忠敬は農業や酒造業など様々な日々の実務を粘り強くこなしたお百姓さんだったのでしょ。そしてそれらを引退したあと、50歳になってから、天文・測量をしながら自分の足で粘り強く歩いて、日本地図を作り上げられたのでしょ。

伊能忠敬は昔の人ですが、皆さんの具体的な目標となるのがSei-Tanの先生方です。実社会でバリバリと働いていた、翻訳家、フライトアテンダント、アナウンサー、公認会計士、簿記のスペシャリスト、ホテルの支配人、コンピュータ教育のスペシャリスト、人材開発の専門家の先生方です。まさに実務家の見本のような先生方なのです。先生というのは一般的にTeacherですが、これは主として「形式知」、知識を教える先生のことです。でも実は先生にはもう一つMentor（メンター）と呼ばれる言葉があります。これは、精神つまり自分の人生や生き方に大きな影響を与える先生のことです。ぜひ、Sei-Tanの先生方の実務家的な能力だけではなく、先生方の人柄、人生観、世界観といったそれぞれの世界に触れて、メンターの学びを受けてください。

(2)「社会に役立つ」ということ

①1960年代の中学校で学んだこと

私は、1950年生まれの子供の五黄の寅年ですから、2022年はちょうど72歳。青森県の南部にある三戸（さんのへ）郡に生まれました。父はもととりんご果樹園や畑作、養蚕を営む小さな農家の長男でしたが、師範学校を出て郡内の教師をしておりました。師範学校というのは卒業後教師になれば学費が免除されますから、向学心に富む貧しい子弟の恰好の進学先だったのです。三戸郡は岩手県や秋田県に接する北緯40度の奥羽山脈の山間寒冷地、北緯40度というと当時の稲作技術ではほぼ米作りはできませんでしたから一帯は貧しいところです。白米のご飯に加えて、麦や稗などの雑穀を混ぜた主食が通常食でした。中学生の時には田子町というところにおりました。当時の中学校には給食などありませんでした。弁当がある人は教科書を立てて壁にし、その陰で食べていました。おかずなど、梅干し1個、たくあん漬物数枚というのが当たり前、皆恥ずかしがって隠しながら食べていたのです。それでも弁当のある人はまだまし。弁当を持って来られない生徒は教室の外に出て行って水を飲み、時間を過ごして次の授業までには戻ってくるのです。

秋になって取入れが終わり、冬ごもりの準備が始まると、中学の友達は暗く、寡黙になります。1960年代になって石油時代の到来とともに、山林業、とりわけ炭焼きの需要が激減した町では、現金収入を求めて、父親が、あるいは祖父母がいるところでは子どもを預け、両親そろって東京方面に春まで出稼ぎに出るからです。雪に閉ざされた町で子どもと年寄りだけで過ごす冬の孤独と寒さはいかばかりだったでしょう。工事現場などの出稼ぎ中の事故も多かったし、出稼ぎを機に崩壊する家族もありました。テレビも電話も各家にある時代ではなく、高校進学率は50%に届かなかったと思います。

私は中学校三年の担任であった原田隆男先生の言葉を今でも覚えています。「勉強ができる者は勉強して、医者でも学校の先生にでもなれ。金儲けがうまい者は会社を作れ、商売をやれ。手先の器用な者は大工になれ、職人になれ。家を継ぐ者は家を継げ。そうやって、みんなで稼いで（働くという意味）、出稼ぎなどしなくてよい世の中にするのだ」。

勉強のみならず、生きる意味を教えてくださいましたこの先生には本当に感謝しています。そしてこれって「誠実にして社会に役立つ人間の育成」という本学の建学の精神そのものだと思います。

私は中学校を卒業した後、父が他市町へ転勤したこともあって、もう50年以上田子町を訪れていません。つまり何も町に貢献できず、原田先生の教えを守ることにはできませんでした。けれども、私が中学生の頃にはなかった「にんにく栽培」が成功し、ここ20年くらいで町の特産品として「田子にんにく」が全国ブランド商品になっているということです。私もスーパーなどで時折このにんにくを目にし、原田先生の教えを守って実践して下さった方がおられたのだ。今はもう出稼ぎなどをせずとも暮らしていける町になっているだろうかとうれやうさとありがたさと申し訳なさと、胸がいっぱいになります。

②北陸地域の課題

石川県のみならず北陸地域の抱える大きな課題に過疎過密の問題があります。ことに石川県では能登地域の過疎化が進んでいます。なぜ若者が故郷を離れるのか、帰りたくても帰れないのかというと、仕事がないからです。なければ、新しく作りましょう。Sei-Tanの卒業生で、大学時代サークル活動で知り合って結婚し、能登半島の漁師さんに嫁いだ女性がいます。子どもも生まれて幸せに暮らしているそうですが、夫がとってきた魚やカニを、Sei-Tanで培った経営実務のノウハウを使って加工販売し、地域に新しい風を吹き込んで、評判になっているそうです。これも一つの夢の実現です。社会への貢献です。

また自分でパン屋さんをやってみたい、地元を豊かにするために、特産品を使った新しい商品を開発して、販売してみたい。そういう方もいらっしゃると思います。Sei-Tanには自らも地元野菜の小坂レンコンや打木カボチャを使ったチョコレート・クッキーを試作販売するなど、起業（ベンチャー）を後押しする経営学の先生もおられます。

地域を支える公務員となることを志望する方には、充実したキャリア・ディベロップメント・プログラム（CDP）がありますし、皆さんの進路全体は進路支援課が強力にバックアップします。

このようにして、2020年度（3月31日段階）の実質就職率なんと93.5%、北陸の短大ではトップレベルだと思います。四年制大学出身者でも難関とされる難関企業にもSei-Tan生はぐいぐい食い込んでいます。

同じように、2020年度には、国家公務員・地方公務員にも延べ13名が合格いたしました。また二年間一生懸命勉強しているうち、もう少し勉強してみたい、家族も応援しているということで、金沢星稜大学や他大学、専門学校にも計7名が進学しました。自分の夢を叶えるとともに、人々に喜んでもらい、地域のために役に立つ。これを「自利・利他」と言います。

このように見えますと、社会のSei-Tan教育への期待には大きなものがあることがわかります。Sei-Tanは四年制大学に比べて、レベルが低いわけではなく、二年間で大学教育を完結させる高等教育機関なので、「選択と集中」。あれもこれもではなく、しっかりとターゲットを絞って集中的に勉強する点に特色があるのです。私たち教職員は自信と誇りをもって、誠実にその使命を果たしたいと思います。

4. スクールとカレッジ

皆さん、スクールというのは学校の意味ですね。このもともとの語源は古代ギリシャ語でスコレーと言います。基本的な意味は「暇」もしくは「ゆとり」です。古代ギリシャでは、自由市民、と言っても男性だけなのですが、彼らは奴隷に働かせて、自分たちは働かない。働くのは政治と戦争の時だけです。ですから、普段は、暇な人たちが集まって、哲学や数学、音楽、芸術、体育などをやっていたのです。その水準はとても高く、現代につ

ながる学問や芸術の基礎が作られたわけです。そうした場所が暇な人たちが集まるところ、つまりスコレーがスクールという言葉になったわけです。

それに対して、大学というのはカレッジと言います。ユニバーシティという語もありますが、カレッジをいくつかまとめた大きな概念だと考えてください。カレッジというのは、もともとはラテン語で修道院の「同僚・仲間」を意味するコレグに由来します。

修道院というところは、キリスト教の神について学ぶところです。キリスト教では、神の前には人間みな平等な位置にあります。年齢、性別、階級、職業など全く関係ありません。例えば聖書の解釈をめぐって、議論になった時、どの説が正しいかを決めるのは論理や言葉であって、その人がどんな職業であるとか年齢であるとかは全く関係がないのです。

例えば、会社では社長、部長、課長、係長、平社員とあって、社長が「こうだ」と言ったら、後の人たちはそれに従います。スクールでも一番上には文科省があるのかもしれませんが、一般的に例えば学校では、校長先生が決定すれば、後の人たちはそれに従いますね。でもカレッジはそうではありません。学問や真理の探究という場では、学長や副学長、学科長、教授、准教授といった先生方の職階の違い、ないし二年生、一年生など学年の違いも意味を持たないのです。真理に最も近い人が良いのです。ですから、先生方が言っていることをよく聞き、理解して、本当だろうか、ここは違うのではないかと批判的に受け止めて自分のものにしていくという考え方や態度がカレッジにはふさわしいし、また必要になります。

多数派と少数派をめぐる有名な集団心理の実験があります。たとえば一つの教室中に、お互い初対面だと知らされた30人の人たちがいます。普通であれば、ほとんどの人が「青」と答える青緑色のカラースライドの色を答えさせる実験です。ところが30人中20人はサクラ（やらせ）で、最初の人から次々と「緑」と答えさせるのです。すると15番目くらいにいた被検者は「青」だと思った自分の意見を正直に答えられずに、周りに合わせて「緑」だと言ってしまうのです。集団同調心理と言ってもよいかもしれません。でも面白いことに、10番目くらいの人（これもサクラ）が「青」というと、15番目の被検者はほっとして、自分だけじゃないのだと思って、正直に「青」と答えることができるという実験です。もちろん答えは「青」が正しいのです。これは、世の中にあって、周りに流されずに、少数意見であってもきちんと主張することの大切さを教えているものです。これはスクールでは少し難しいかもしれませんが、カレッジでは、あるいはカレッジを卒業しましたというならば、身につけておかなければならない資質であると思います。どうか皆さん、少数意見であることを恐れずに語れる知性と、自分を主張できる勇気を持って下さい。それがカレッジなのです。

5 本当のことを教え、考えるのがカレッジ

小中高は、ジュニア、ジュニア・ハイ、そしてハイスクール。スクールではそれぞれの年齢、発達段階に応じてわかりやすく教えます。例えば、小中の児童生徒たちを教える先生たちは「やればできる」「努力すれば夢はかなう」と、教えます。でも、中学生、高校生になると、何となくそれは理屈の上ではそうなのだけれど、実際は嘘だよなと思った方もおられると思います。それはそう思ったあなたのほうが正しいのです。私は中高生になったら、もう少し大人扱いして、「努力すれば夢はかなう」という段階から、「努力しても叶わないことがある」「むしろその方が圧倒的に多い」「それでも努力を続けることが尊いのだ。それをできるのが若さというものだ」という形で、本当のことを教え、人生における人間の尊厳と謙虚さを少しずつ身につけさせることが大事ではないかと考えます。それが真理の探究ということです。カレッジではそういうことを大事にしていきます。真理は辛口もしくは苦いかもしれませんが、でも良薬ほど口に苦いものなのです。

私はスポーツ大好き学長なので、さまざまなスポーツを見て、勝って喜び、負けては悔しがりします。なぜそんなにひきつけられるのかといえば、日本選手やひいきの星稜チームの勝敗に関心を寄せたり、高度なプレー技術に魅了されることもあります。それ以上に、必死に努力したり、困難に耐える人間の美しさや肉体の極限にある美しさに感動するからです。そして、さらにそれらを凌駕する運命の不可思議さとも言うべき、神々しいもの、聖なるものを見て感動しているからなのです。これで勝てると思った最後の打球が石ころか何かに当たって、思わぬバウンドで取り損ね、そこから逆転されることもあるのです。なんという神様の采配、運命のいたずらでしょう。

今やわれわれの日常生活の中で、肉親の死や子どもの誕生といった私事性を超えて、一喜一憂し、涙を流すほどの感動を与えてくれるできごとはそう多くはありません。そうした感動を与えてくれるのがスポーツだと私は思っているのです。かつて、西行法師が「なにごとのおはしますか知らねども かたじけなさに涙こぼるる」と歌ったように、それは宗教が担っていたものですが、現代ではイスラム教を除けば、宗教の力は全般的に弱まっています。スポーツは世俗化された現代の宗教だと私は考えていますが、今日はこれ以上触れません。

努力しても報われないことはあるけれど、たとえ報われなくともやり続ける力強さ・たくましさこそが若さなのであり、人間のすばらしさなのだと、私は思います。

ニーチェというドイツの哲学者は、ギリシャ神話の「アルゴの船乗り」を引用してそのことを次のように語ります。

「アルゴの船乗り

理想とするアルゴの船乗りたちは、たぶん馬鹿みたいに勇敢に、幾度となく難破し、破損しながら、しかし…、けしからんほど健康で、危険なほど健康で、どんなに疲れてもすぐまた健康になりつつ、長い船の旅を続け、やっとその甲斐あって人跡未踏の

陸地にたどり着けそうな気配がする。」(注5)

このアルゴの船乗りたちのように、たくましくなりたいものです。失敗や挫折はつらいものです。その時、泣いてもいいが、くじけてはならないのです。

このような、苦いけれども本当の真理・真実を、躊躇なく皆さんにぶつけるのもスクールとは違ったカレッジの役割なのです。

おわりに 心の中の星（内なる道德律）

まとめましょう。「誠実」に生きるには、自分の心の中に北極星を持つことです。北極星が見えれば（あるいは羅針盤があれば）、大きな海に漕ぎ出した船は、嵐や台風を避けながら、時間がかかってもいつかは目的地に到達することができます。それがないと、大海の中で方角を失い、あちこちをさ迷い、遭難してしまいます。

周りや世間がどう騒ごうとも動じない、自分の心の中の北極星、哲学者のカントはそれを「内なる道德律」と呼びました。私は「心（の中）の星」と名付けています。

最後に、カントの『実践理性批判』という本の結びになっている有名な言葉を紹介します。

「しばしば、そして長く、それを考えれば考えるほど、ますます新しく、ますます大きな驚嘆と畏敬で心を満たすものが二つある。

それは、わが上なる星の輝く空と、わが内なる道德律である。」(注6)

皆さん、Sei-Tanで「心の星」を見つめ、充実したキャンパスライフを送ってください。

注

注1) 本稿は、2020・2021年度の内容を取捨選択し、加筆修正しています。

注2) 産業競争力会議下村大臣発表資料(2021.10.18取得) https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afldfile/2013/04/17/1333454_11.pdf

注3) 人事院「国家公務員の初任給変遷」(2021.10.18取得)
https://www.jinji.go.jp/kyuuyo/index_pdf/starting_salary.pdf

注4) 井上ひさし『四千万歩の男』(全5巻)講談社文庫、1992-93

注5) F. ニーチェ (川原栄峰訳)『この人を見よ』(ニーチェ全集15)、ちくま学芸文庫、1977、133頁。一部改変

注6) カント『実践理性批判』(レクラム版、Immanuel Kant, Kritik der praktischen Vernunft, Reclam 1961, Stuttgart, S.232. 訳は川原栄峰『時の峰々』南窓社、2004、77頁による